東京講演会

カポエィラの身体知

ノルデスチ（ブラジル北東部）文化のなかの女性

話し手…………ホザンジェラ・アラウージョ　バイーア連邦大学教育学部准教授

パウラ・バヘット　バイーア連邦大学社会学部准教授

聞き手／通訳…三砂ちづる　津田塾大学国際関係学科教授

三砂ちづる　会場には、ほとんどカポエィラのことは知らない方も来ておられるので、まずカポエィラとはどのようなものかという話から始めます。

私は母子保健、お母さんと赤ちゃん、女性のことを研究していて、それに関する本もたくさん書いている者ですが、私が今日ここに呼ばれたのには理由があります。私は2000年の終わりまで約15年のあいだ海外で暮らしていて、そのうち10年ほどをブラジルですごしました。

■ 日本の東北地方とイメージが重なるブラジルの北東部（ノルデスチ）

三砂　ブラジルは地域によって文化や風土がまったく異なります。カポエィラが盛んな地方、そして今日のメストラたちがいる地方は、ブラジル北東部（ノルデスチ）です。日本の方にはブラジルの北東部のイメージが湧かないかと思いますが、ちょうど南アメリカ大陸の肩ぐらいにあたる部分、赤道からわりと近い大西洋沿いの地域です。2014年のサッカーのワールドカップで日本が試合をしたレシフェやナタール、ネイマールがけがをしたセアラ州のフォルタレーザがノルデスチにあるまちです。

ブラジルのノルデスチのイメージは、日本の東北地方とよく似ています。日本の東北は自然も文化も豊かで、そこに暮らす人びとは人情もあって、食べ物もおいしい。ただし気候が厳しくて、日本のなかでは辺境と言われるところです。ブラジルのノルデスチも似たイメージです。早い話が、中心に収奪される周縁です。日本でもブラジルでも東北部は、東京あるいはサンパウロ、中心から収奪されていた地方というイメージがあるところです。

私はブラジルにいた10年のあいだ住んでいたのもノルデスチのフォルタレーザでした。ノルデスチに10年住んでいて、しかも女性の体、お産に関する仕事をしていたので、今回メストラたちがおいでになった機会に呼んでいただいた次第です。

私の息子二人も、フォルタレーザにいるときに、ヘジョナウのほうですが少しカポエィラをしていたこともあって、見たことはありますが、自分で実践したことはありません。

常にカポエィラには敬意と興味をもって拝見していましたので、メストラたちをお迎えしてほんとうにうれしく思います。今日は私が日本の代表として、みなさんが聞きたいことをメストラたちに聞いていくという役割で参加させていただきます。どうぞよろしくお願いします。

■ カポエィラの発祥と変遷およびカポエィラ・ヘジョナウの誕生

ホザンジェラ・アラウージョ　現在カポエィラには、大きく分けて二つの流派、カポエィラ・アンゴーラとカポエィラ・ヘジョナウがあります。本日は、カポエィラ・アンゴーラにおける女性にとくに焦点を当てて話をします。昔は、カポエィラ・アンゴーラの師範やそれを練習する人たちのほとんど、99パーセントが男性でした。その男性たちは、奴隷としてアフリカに連れてこられた人の子孫です。カポエィラを練習していたのも公式な場所ではなく、道などでした。

まずはカポエィラとカポエィラ・アンゴーラについて説明します。16世紀に奴隷としてブラジルに連れてこられたアフリカ人によって「カポエィラ」という名前が運ばれたわけではありません。もともとブラジルにあったカポエィラという現地の言葉が、アフリカ人が持ってきた動作、風習などと関連づけられて、「カポエィラ」と呼ばれるようになりました。

カポエィラをしていた人たちは奴隷たちで、彼らが管理をされていた主人たちに、それが何かわからないようにしていました。彼らはそれを森のなか、自然の

ホザンジェラ・アラウージョ

なかで行なっていました。

19世紀には、カポエィラをしている男性たちが、「マウタ（malta）」という名前でカポエィラをオーガナイズしはじめます。そのマウタはアフリカ系の子孫が生活している場所でオーガナイズされており、もちろん政治的なメッセージ、政治的な戦いがその地域に存在していました。

19世紀末にはブラジルの支配者が、法律によってカポエィラを禁止しました。もしカポエィラをしていて捕まると、公共の広場などで見せしめのように鞭打ちの刑にされました。

バイーアでは20世紀初頭、1930年に現在のカポエィラ・ヘジョナウの原型となるものが「バイーアの格闘技」という名前で生まれ、のちのちそれがかたちとなります。そのカポエィラ・ヘジョナウが白人層や富裕層に浸透していって、ブラジルの国民的なスポーツになります。

■ カポエィラのシステムに顕著にみえる 日本の武道や文化の影響

ホザンジェラ　じつは、カポエィラが政府に認められたり社会に認められるにあたって日本が大きな役割を果たしていることは、みなさんご存じないと思います。1930年代、20世紀の初頭から、ブラジルにおける日本人移民がカポエィラにも大きな影響を与えました。たとえば日本における空手などの表現、格闘技の要素などが影響を与えます。着物のような形式の白い柔道着、あとは帯に色がついていてそれが段位を表したり、師範と弟子との関係性があったり、このようなことは日本が影響を与えたのです。

空手で段位が上がると帯の色を変えていく段式をカポエィラでも始めたわけですが、そのなかで、帯に「コルダォン（Cordão）」という名前をつけました。ブラジルの国旗の色を思い出していただければと思いますが、外が緑から始まり、中に黄色い菱形があって、さらにその中に青い丸があって、丸の中に真っ白の線があります。段が上がっていくと国旗の中心に向かう順番で帯の色が変わり、師範に向かっていきます。

■ スポーツとして全土に拡がったカポエィラを 抵抗の文化・運動として取り戻すアンゴーラの戦い

ホザンジェラ　こうしてカポエィラにおける二つの流れが生まれました。一つはアフリカ性、自分たちがどこから来たのかという起源、そして自分たちの舞闘・ダンスがどこから来たのかという起源や、アフリカを母と認識してカポエィラを学ぶ側面と、もう一つはスポーツであり、現代的なものであるという側面とに分かれます。

こうしたヘジョナウの動きによってカポエィラがブラジル全土に拡がることとなり、多くのみなさんが実践することになりました。その後1980年代からはカポエィラ・アンゴーラが、ブラジル全土に拡がったカポエィラを変えるために、とくにメストレ・モライスという師範がメストレ・パスチーニャの思想を復活させる運動を始めました。

そこには強い政治的なメッセージ、強い運動がありました。ブラジル政府の卑劣な行為、卑劣な思想がまずカポエィラを禁止したという事実。そしてカポエィラをエリート、白人であったり富裕層のものにしていこうとしたり、スポーツ化しようとしたなどのことです。

1980年代から政治のなかで独裁政権に対する戦い、社会的抑圧、そして凝縮された社会の戦いのなかで、私やメストラ・パウリーニャ、メストレ・ポロッカが力を合わせて戦いました。この時代から、カポエィラ・アンゴーラは再認識されるようになりました。カポエィラとして世界的に拡がってしまったイメージを、「カポエィラ・アンゴーラというものはこういうかたちだ」ということで取り戻す運動をしたり、思想をみなさんに広めるのは1980年代からになります。

■ 1980年代における軍政への抵抗手段だった カポエィラ・アンゴーラ

三砂　質問をしながら進めます。カポエィラはもともとアフリカからきたもので、それがブラジルのなかでスポーツとしてのカポエィラ、「カポエィラ・ヘジョナウ」になっていったのですね。1980年代はブラジルは軍事政権でしたので、その時代に抵抗の一つの方法として、もともとあった伝統的なカポエィラをカポエィラ・アンゴーラとして、このグループの人たちが作り

東京講演会には50名が参加

上げようとしてきたという理解でいいですか。

ホザンジェラ　概ね、よいと思います。でも、作ったわけではなくて、もともとあった伝統的なものを取り戻そうとしたという感じです。

カポエィラは住むところがないような人たちが陰でしていただけだったので、まったく注目されていなかったし、表に出ていない部分がありました。カポエィラを教える場所もありませんでした。

サルヴァドールに「フォルチ・ダ・カポエィラ」というところがありますが、そこで初めて目に見えるようなかたちになりました。そこはもともと牢屋で、その当時は使っていなかったので、軍政下のブラジルでそこを使って伝統的なカポエィラ、カポエィラ・アンゴーラというものを見えるようなかたちにしようとしました。その場所はほとんど使われていなくて、あまりいいところではなかったのですが、そこを抵抗の拠点にしていきました。

三砂　1980年代というのはついこのあいだのことで私たちにはそのような状況は想像できませんが、1980年代のブラジルは軍政時代でした。そのときの抵抗の一つの方法として作られていったということです。

ホザンジェラ　バイーア州は、ブラジルでもアフリカ出身の方が多い地域です。1980年代は、その人たちが自分たちの権利や女性たちの権利、自分たちの存在を表に出していこうとした時代でもありました。

三砂　自分たちがカポエィラ・アンゴーラを作り出したわけではなく、カポエィラの伝統的なかたちを1980年代の抵抗運動のなかでかたちにして見せることをしていくようになったということですね。

■ 抵抗の文脈のなかで女性を大切にしてきたカポエィラ・アンゴーラ

ホザンジェラ　スポーツとしてのカポエィラには、男性的、マッチョなイメージがありました。私たちはカポエィラ・アンゴーラを始めてそのことを可視化したので、抵抗運動の文脈において私たちカポエィラ・アンゴーラのなかでは、女性の存在を大切にしました。このことについてはすべてのメストラたちが、みなさんに理解してもらいたいと思っています。

カポエィラの師範のひとりコブラマンサという男性のメストレが、アメリカでカポエィラの会議があったときに、「女性たちをメストラにしていく、カポエィラを女性たちのものにしていく」と会議でも発言するようになりました。抵抗の文脈のなかにおける伝統的なカポエィラ・アンゴーラは女性の存在を大切にしていったのです。

1980年代にメストレ・コブラマンサがそういうことを言い始めました。「ここにいるのは男性でも女性でもなく、カポエィラをやっている人たちなんだ」という言い方で私たちを紹介してくれるようになったことは、たいへんな喜びでした。

■ カポエィラのなかで女性が成長することを阻む社会的問題とカポエィラ自体の構造の問題

ホザンジェラ　しかし、そのあとは、そんなにうまくいきません。やはり男の世界なのです。「カポエィラをしている人」ではなく、「カポエィラをしている女」と見られるので、なかなかメストレが理想的に言うように

は動きませんでした。

私は、カポエィラというもののなかには、女性に関わる課題そのものが存在すると考えています。しかし、そういうことは、男性にはよくわかってもらえない。カポエィラのなかに私たちは女性の本質のようなものを見出したいのですが、そういうところは男性には理解されない部分があると思います。

表面では同じだと言いますが、やはりカポエィラのなかで女性として成長していくことは、とても難しいことでした。その理由の一つは、ブラジル社会の女性に対する先入観、ジェンダーの問題です。「女性は弱い」とか「女性は子どもだけ見ていろ」というブラジル社会におけるジェンダーの問題がありました。

もう一つは、カポエィラのなかの問題として、女性として活動をしていたいろいろな役割が、カポエィラのなかでの基本的な役割ではなかったことが挙げられます。やはり女性は大切な役割に入れなかったのです。カポエィラのなかで、たとえば女性はビリンバウという楽器を弾かせてもらえないなど、カポエィラ自体の構造の問題もあったのです。練習場でも、女だから「トイレを掃除しろ」とか「道場をきれいにしろ」とか言われてしまう。それがカポエィラのなかでの大きな問題でした。

また、これは日本でもよくあることだと思いますが、たとえば夫婦でカポエィラをしていても、子どもができたら、子どもの世話をするのは女性になってしまうので、男の人はずっとカポエィラを続けられますが、女性は子どもを育てなければいけない。これは女性がカポエィラをしていくことの困難の、ちょっとした例にすぎません。ほんとうはもっとややこしくて難しい問題が、女性としてカポエィラを続けるためには存在しているのです。

女性への暴力反対という意味から、この問題に取り組むこともできると思います。このような問題は存在しないことにされているので、女性たちが一丸となってこの問題について議論して、女性としてどう生きるか、カポエリスタとして自分がやっていくことが難しいということを、もっと可視化していくべきです。

カポエィラのなかでさまざまな役割を果たしてきたことが、きちんと価値を与えられていない。いろいろな女性が一所懸命にしていることが認められていないことを、もっと目に見えるようにしていくべきじゃないかと思います。

19世紀から女性がカポエィラを実践していたことについては、明確な資料が残っています。その資料は、19世紀にカポエィラをしていたために牢屋に入れられていた女性たちについての記録です。ブラジルが共和国になる前から女性がカポエィラのなかに存在していたことを示しています。

19世紀にカポエィラをしていたために牢屋に入れられていた女性たちがどのような言い方をされていたかというと、それはひどい言い方です。「男性のような女性」という言い方で、「脇毛が生えている女」というような表現をされています。女性を侮辱するような言い方ですが、19世紀からカポエィラをやって牢屋に入れられた女性の存在が書かれていて、歴史には残っている。昔から女性でカポエィラをする人はいたという記録はあるのです。

女性だけのグループの創出とカポエィラ女性会議の開催

ホザンジェラ　1980年以降には、女性たちは女性だけのカポエィラのグループを作り始めました。世界中で、女性だけのカポエリスタの会議というものもしています。

シアトルでも女性のカポエリスタを集めた会議をしましたが、日本の女性が参加してくださったことがありました。私たちは女性のための会議も世界中でやっています。いろいろなカポエィラのグループのなかに、必ず女性のための場所を作ってきたのです。

現在はインターネットを通じて、それぞれの女性のカポエリスタが集まったグループが、「こういう差別があった」とか「こういう問題があった」と、カポエィラのグループのなかであった問題を共有できるようにもなっています。

現在では、かつてはカポエィラのなかで男性だけがしていたことも、女性がすべてできるようになっています。いまではビリンバウも演奏しています。

ブラジルのなかの女性たちのグループは、リオ、フォルタレーザ、サルヴァドール、マセイオなど、いろいろなところでできています。マセイオは、ノルデスチのなかでもとりわけ辺境の地域です。サルヴァドールやフォルタレーザはまだましで、マセイオはほんとうに田舎ですが、そこでは女性のカポエィラのグループは、自分たちをフェミニスト・グループだと呼ぶぐらい活発に活動しています。

ブラジル全土のなかでのカポエィラ・アンゴーラのネットワークも作っています。インターネットでつながっていて、38か国の女性たちが、このネットワーク

に参加できるようになりました。

カポエィラのスピリットとしても、アフリカからやってきた伝統としても、女性の存在はよく見えない状態になっている。女性がカポエィラのなかで見えない状態になっています。

ブラジル北東部、サルヴァドールには、カンドンブレというアフリカの呪術的な影響を受けた宗教があります。そこで祀られる神様のことをオリシャ(Orixá)と呼び、そのなかに海の神様であるイエマンジャ(Iemanjá)というカンドンブレのなかでも人気のある女神様がいます。カポエィラでもその女神様のことをよく歌いますが、その他の歌のなかには女性がぜんぜん出てきません。

女性への暴力反対キャンペーンを展開し アフリカの女性の救済もめざす

ホザンジェラ　女性のグループでいろいろな活動もしていきます。世界の女性への暴力反対のキャンペーンにも参加しました。

私たちカポエィラをしている女性グループは、女性への暴力の禁止を求めて、マニフェストや宣言も作っています。そのベースになっているものの一つが、ブラジルにある「マリア・ダ・ペーニャ法」という法律です。マリア・ダ・ペーニャという女性は、東北部のセアラ州で家庭内暴力を受けて、現在では車椅子に乗っていなければいけない女性です。彼女が家の中での暴力によってそういう状態になったことを忘れないためにブラジル政府がそういう名前をつけました。私たちはこのような法律を紹介しながら、自分たちは女性への暴力を許さないとか、女性の売買を許さないとか、そういうことについて強い宣言をしているんです。

ヨーロッパのカポエィラ・アンゴーラの師範がカレンダーを作っています。ビリンバウなどを使って、女性への性的な搾取や女性への性的な抑圧を許さないというメッセージをこめて作りました。しかしそのカレンダーは、女性に対する暴力に反対する強い、過激な宣言をしたために、ヨーロッパでは発売禁止にされてしまいました。

パウラ・バヘット

カポエィラはアフリカからきたものですが、いま私たちカポエィラをしている女性たちのグループは、ぜひこのカポエィラを持ってアフリカにもう一度戻っていきたい、アフリカに入っていきたいと考えています。アフリカは、女性がもっともっと厳しい状態にあると思いますので、アフリカに戻っていきたいと思っています。

カポエィラには 女性を抑圧し、侮蔑していた過去が存在する

19世紀から20世紀にかけて、カポエィラをしていた女性に男性がつけた名前を見ると、女性がどのように扱われていたかがよくわかります。

それは男性が見た女性というかたちで付いた名前で、たとえば「おじょうちゃん」、「小さい子」とか、なかには「だれだれの女」、「12人の彼氏をもっている女」といった名前も見えます。ようするに女性をバカにするような言い方で、記録に残っているのです。

カポエィラをしていたというだけで、19世紀から20世紀には、こんなひどい名前を付けられている。「悪魔」とか「電車を止めるマリア」というのもあります。電車を止めるぐらい強いという……。どれもひどいニックネームをつけられています。これを見ても、男性化されている、男性の好きなようにされてしまっていることがうかがわれます。

このようなものを見ると、女性がどのように扱われていたかが明らかになるとも言えます。それがカポエィラの歴史でもあるわけです。

宗教・文化に根ざしたカポエィラは 世界に出てどう受け止められたのか

パウラ・バヘット　ホザンジェラさんが概略を話してくれましたが、私はカポエィラの世界への拡がりについてお話しします。

1960年代から、カポエィラはどんどん世界に出て行っています。カポエィラ・ヘジョナウというスポーツとしてのカポエィラ、白い服を着てやっている武道みたいなカポエィラが先に有名になって、アメリカなどに出て行くことになりました。

1980年代以降は、私たちがしているカポエィラ・アンゴーラという伝統的なカポエィラも世界中に出て行っています。アジアにも拡がっていって、日本にま

三砂ちづる

で来ました。

カポエィラは、宗教的・文化的なものと密接に繋がっています。アフリカの宗教的・文化的なものがブラジルに入っている。そのなかで、ダンスや武道の要素やスポーツの要素などがいろいろ出てきたのですが、それがグローバライズされて世界に出て行ったときに、いったいどのような文脈で受け取られるのかについては、興味があることです。ブラジル、アフリカの宗教的な文化に根ざしたものですが、その踊りやプラクティスだけが外国に出て行くのはどういうことなのかについては、考えるに値することだと思います。

カポエィラをしているみなさんはご存じのように、たとえばカポエィラの音楽で使っている言葉はすべてブラジルのポルトガル語です。カポエィラの音楽の詩の内容は、ブラジル文化に根ざした詩です。しかもバイーアやブラジル北東部に関する内容です。カポエィラで歌われる歌にも女性が出てきますが、その女性の描き方にも差別的な部分があるわけです。

ブラジルからカポエィラが世界中にどんどん拡がっていくことは、カポエィラのプラクティスと同時に、カポエィラに込められたブラジルの独特の文化がだんだん外に出て行って、よく知られるようになっていくとも言えます。

■ カポエィラは日本でどのように受容され どう変わっていこうとしているのか

パウラ　いまカポエィラはあちこちに拡がっていますが、ブラジル政府などのサポートがあったわけではなくて、カポエィラをしている女性や男性が、自分たちで広めていきました。それはある意味で言えば、ブラジルの文化、しかもブラジルの文化のアフリカ的な部分がカポエィラに乗って世界中に拡がって、世界中の人が知るようになってきているとも言えます。

同時に、カポエィラはその土地ごとの文脈のなかで違ったかたちになって拡がっているところもあります。カポエィラを日本でしておられる人に話してもらうといいと思いますが、このブラジル文化であるカポエィラが日本に入ってきたとき、日本のなかでどのようにモディファイされて、日本のなかでどのように受け取られているのか、日本の文化のなかでどんなふうに変わっていくと思うのか、実践している人に話を聞いてみたい気がします。日本でカポエィラをすることがどういうことなのか、ぜひ話していただきたいと思います。

少し付け加えると、興味深いのは、ブラジルをいったん出たら、カポエィラをしている人は圧倒的に女性のほうが多いのです。日本でもヨーロッパでもそうです。女の人ばかりです。マジョリティが女性という、これまで話してきたブラジルとは逆の現象が起こっています。他の国で女性たちが増えていることは、カポエィラ自身にも変化をもたらしていると思います。

■ カポエィラをする女性は増えているが 女性の占める位置・役割についてはどうか

パウラ　日本という文脈のなかでカポエィラをするのがどういうことか知りたいというのが質問の一つ目で、もう一つ質問があります。カポエィラはもともとほとんど男性がしていて、女性が始めたのは最近です。ですから、男ばかりの世界だったところに女性が増えてきた。医者などもそうですが、かつては男ばかりしていて、いまは女の人が入ってきている。カポエィラもその一例だとも思います。

とにかくカポエィラをする女性の数が増えていくのは重要で、それはカポエィラ全体を変えるためにも大切なことだと思います。しかし、数だけではないですね。クオリティという意味もあると思います。女性がカポエィラのなかでどのような位置を占めているか。数は増えているけれども、いまは数だけではなくクオリティも重要視しなくてはいけない。

たとえばグループのリーダーシップの取り方などです。女性はたくさんいるのに、いざリーダーを選ぶとなったら男になるということもあります。クオリティというのはそういうことを申し上げています。

日本のなかでカポエィラをすることを、みなさんは文化的にどのように受け止めているのか。日本でカポエィラをすることは、よそでするのとどう違うのか。文化として外に出て行くアスペクトという部分についても聞きたいと思います。また日本では女性が多いようですが、そのなかで女性がリーダーシップをとれ

参加者はカポエィラの実践者、研究者、学生など。とくに女性の姿が多く見られた

ているのかについても聞きたい。あるいは、みなさんが私たちに聞きたいこともあると思いますので、質問をしていただきたいと思います。

■ 生きづらい人に示唆を与える ノルデスチ文化を体現するカポエィラ

三砂　私は今日は補助的に入っているので、自分の話をする気はないのですが、カポエィラのことを知らない方も、カポエィラのことがわかりましたでしょうか。私は今日の講演会で、みなさんにカポエィラのことを理解していただくと同時に、ノルデスチという地方の文化にも興味をもってもらいたいと思っているのです。

ブラジルはまさに移民の国です。もともとブラジルにいた人は、いわゆるインディオとよばれる人だけで、いろいろな人たちが入っていろいろな文化を作っていて、地方によってそれがまったく異なります。

私はブラジルのことを、21世紀のリーダーになる国だと思っています。それはなぜかというと、一つには、ブラジルが経済的に成功していることもありますが、ブラジルは、いわゆる近代化を達成した近代社会であるにもかかわらず、人びとのコミュニケーションが豊かであって、人間性が損なわれていない。そこがブラジルが次の世紀を担っていくうえで重要なことだと思います。近代的な社会になると同時に人間関係は薄くなりますし、人間関係が難しくなりますが、ブラジルはそのあたりに前近代のよさみたいなものをすごく残しているところがあるんです。

ノルデスチというのはブラジルのなかでも開発が遅れた地域と言われてきたのですが、こうした人間のあり方とか、コミュニケーションのあり方とか、前近代的なものとのつきあい方とか、そういうことについて、私はこのノルデスチという地方がブラジルという国を豊かにしていると考えています。

カポエィラは、そういうブラジルのノルデスチの文化の代表のような現れの一つだと思っています。ですから、おそらく日本でカポエィラをする人たちは、近代的な社会になってしまった日本のなかで、どこか生きづらい、どこかしんどい、どこか苦しい、仕事だけしていてボロボロになったとか、そういう人たちに大きな一つの示唆を、インスピレーションを与えるものになっているのではないかと思います。

ですから、ノルデスチの文化がブラジルの文化に一つの大きな深みを与えているのと同じように、その一例としてカポエィラが日本の、生きづらさを抱えているとくに女性たちに、大きな意味をもってきているのではないかと私は想像しているのです。

ということで、日本の女性たちで――男性でもいいですが、「私にとってカポエィラをするとはどういうことか」について、質問でもコメントでもいいので、ぜひメストラたちに話していただきたいと思います。

■ カポエィラで相手と折り合っていく動きから コミュニケーションにおける体の使い方を学ぶ

参加者1　私は1回しかカポエィラをしたことがなくて、ふだんはヨガをしています。ヨガをしていると、よく「人とのコミュニケーションにヨガを役立てよう」みたいなことを言うのですが、私はマットの上でしているヨガのことを、ふだんの生活に活かすということがどんなことか、あまりわからないというか実践に移せていなかったのです。カポエィラをしてみると、カポエィラはヨガと違って相手がいます。相手の動きだったり、相手の空気を受け止めて、否定せずにそれと折り合って自分もまた動いていくということが、す

ごく日常生活に近いなと思いました。

いまの日本人は、体を使ったコミュニケーションがあまり得意じゃない人が多いと思います。そういう日本の社会においてカポエィラをするということは、自分の体をどのように人との関わりにおいて使っていったらいいかということを学ばせてくれるすごくいいツールだなと思いました。

カポエィラから感じられる「なにか得られるものがある」という予感

参加者２　私がカポエィラと出会ったのは10年ほど前で、メストレ・コブラマンサが最初に来たときです。最初はすごくアクロバティックな動きをなにかのメディアで見て、興味を持ちました。おそらくヘジョナウかコンテンポラニアだと思います。

でも、私がたまたま出会ったのはコブラマンサの弟子の方で、縁があってアンゴーラを学ぶことになりました。最初の印象とは違いましたが、とても惹かれるものがあって、コブラマンサが来て、「うわ、なんだこれは」と。よくわからない、難しい感じで、すてきなんだけれど「なんなんだろう」というクエスチョンがたくさんありました。私は10年前に出合って、１年とかもっと長い間しなかったこともありましたが、いまは仲間たちができて環境に恵まれて続けています。

ポルトガル語だし、難しいことがたくさんあって、挫折してしまいそうだけれども続けていたのは、カポエィラを続けていたらなにかいいことがあったり、得るものがあるという予感がしたので、ずっとやめないでいました。日本は社会が、やはり仕事がメインになったりして、どうしてもそちらに偏った生活になってしまうのですが、でも、いい予感がしたので、これからもその予感を信じて続けていきます。

最後に、私はそのカポエィラで旦那さんを見つけました。（笑）

カポエィラは体を使った非言語のコミュニケーション・ツール

パウラ　カポエィラは、やはりコミュニケーションのツールだと思います。言葉のコミュニケーションだけではなく、ノンバーバルなコミュニケーションのツールのように考えています。

私たちはメストレに習った最初から、「カポエィラは体を使った対話である」と学んできました。体のいろいろな学際的な研究のなかで、カポエイラのプレイ、カポエィラをすることが、言葉だけではないノンバーバルなコミュニケーションのなかでどのように使われているのか、どのようにノンバーバルなコミュニケーションができあがっていくのかということについて、ずいぶん学際的・国際的な研究もされていると思います。

講演会の最後にはビリンバウの演奏も行なわれた

他の人とのコミュニケーションは、いつもうまくいくとは限りません。うまくいかないこともよくある。でも、それは言葉だけのことではないのです。やはり社会のなかでのコミュニケーションの重要な部分は、じつはノンバーバルな部分だと思います。

その意味では、カポエィラはその人のありようについてもいいことを提供できるし、社会のなかでの人間の関係性についても、カポエィラはとても重要なことを提供できるのではないでしょうか。たとえば学校での教育です。学校の教育はほとんどがバーバルなものですが、カポエィラ・アンゴーラはノンバーバルな教育をしていくうえで、提供できるものがたくさんあるだろうと思っています。

カポエィラの動き、歌、演奏すべてによって人間の複雑な要素を表現し、感じることができる

ホザンジェラ　コミュニケーションという文脈のことで、私も少しコメントしたいと思います。

カポエィラそのものが、私たちの人間性の複雑さみたいなものを表しているとも言えます。カポエィラは、そのときのあなたのようすを表に出していくもの

です。そのときのカポエィラには、いろいろな表現が、同時にたくさん入っているとも言えます。

自分の複雑な中身をカポエィラを通じて表現する方法には、いろいろあります。舞闘、ダンスの動きだけではありません。楽器を弾くときにも、歌を歌うときにも、個人的な要素、情報を表現できると思います。ちょっとしたリズムやわずかな動作のなかに、さまざまな表現がすべて昇華されていると感じます。

カポエィラのホーダのときのカポエィラの歌も、一つのコミュニケーションの複雑なありようだとも言えると思います。その歌は、そこに集まるカポエリスタのみのために向けられたメッセージなので、カポエィラをされない方がそのときその場所にいても、その言葉や歌の内容、表現方法を理解するのはとても難しいことです。不可能に近い。

たとえば、私が今日ワークショップをしたときの歌の内容を紹介したいと思います。

見たことのない人は
ぜひ見に来てください
リクリ（小さな椰子の実）が
デンデー（大きな椰子の実）をつぶすのを
見に来てください

リクリは小さな椰子の実、デンデーは大きな椰子の実です。「小さい椰子の実が、大きい椰子の実をつぶしているのを見に来て」と歌っています。大きな人を倒すというメタファーです。「大きいからといって強いとは言えない」ということです。「あなたは大きいけど２倍じゃないし、私は小さいからといって半分でもない」という言い方もありますが、大きさではないということを歌にして言っているわけです。

多様な言語で自分を表現するカポエィラは洗練されたコミュニケーション法

ホザンジェラ　カポエィラの歌では、音楽、楽器での演奏などといっしょになって、そのときにあなたの体が何を語りたいか、あなたの体が伝えたいことが歌と楽器によって表されます。ですからカポエィラでのコミュニケーションには、動いている二人のあいだだけではなくて、歌を歌っている人、楽器を弾いている人の個人的な要素も影響を与えます。

カポエリスタはさまざまな言語を持っています。歌や体の表現や楽器など、いろいろなものがあります。人間のコミュニケーションの洗練された方法を、カポエィラのなかに見ることができます。体のことをいろいろな言語でさまざまに表現するものになっているのです。

ですから、カポエィラをしていないときでも、相手と会ったときに、その話し方や動きを見ながら、いろいろなことが早くわかるようになる。カポエィラからは、そんな学びがあると言えます。

通訳補助…… 荒川幸祐／
アンドレア・ユリ・フロレス・ウルシマ

左から都留Devaux恵美里、アンドレア・ユリ・フロレス・ウルシマ、パウロ・バヘット、ホザンジェラ・アラウージョ、三砂ちづる、パウラ・バヘット、永井佳子、荒川幸祐